

## 第6回 IIC 会議出席報告

山 崎 一 雄

### 1. まえがき

1975年6月2日～7日ストックホルムで IIC (International Institute for Conservation of Historic and Artistic Works) の第6回国際会議 (Conference) が開かれた。日本からの出席者は私1人であったので、その内容をここに報告する。

IICについては御承知と思うが、簡単に紹介しておく、1950年設立された美術品の保存科学に関する国際学会で、ロンドンに本部があり、会員数(個人と美術館等あわせて)2000、英、米両国が多い。日本人会員数約15名である。Studies in Conservationという雑誌(1年4回)と Art and Archaeology Technical Abstractsという抄録誌(1年2回)を発行している。

今年は IIC の創立 25 周年に当るので、同じく 25 周年の NKF (Nordiska Konservatorförbundet), 北欧保存科学者協会と合同でこの会議を開いたのである。3年間に1回のこの会は今までロンドン、アムステルダム、ローマ、ニューヨーク、リスボン(1972年)で開かれている。

今回の参加者は名簿で見ると英35、米56、仏6、カナダ15、西独7、イタリア9、オランダ6、オーストラリア5、スイス4、ポーランド3、ポルトガル3、ギリシャ2、北欧4国160、台湾、日本、香港、イラン、南アフリカ、イスラエル、ベルギー、ソ連、東独等17国各1等で合計約330人であるが、地元の参加者の追加もあって約350人に達した。しかし北欧はNKFの会議に出た人が多く、IICの実際の参加者は毎日約200人弱であった。

参加費は325スウェーデンクローネで約2.5万円、地元の寄附金が相当あったようであるが、物価は高く運営は苦しかったことと推察される。

### 2. 会場と講演題目

今回の会議の主題は「考古学等の分野における保存」であって、第1日だけはNKFと合同であったが、第2日からは別れて行われ、NKFは主として織物関係の保存法の研究発表と討論を別の場所ですウェーデン語で行ったようである。

会場はストックホルムの中心にある王宮の北に接している旧国会議事堂で、あまり広くはないが、座席はゆったりとしていて、気持のよい室であった。ワイヤレスのヘッドホンがあって、英仏語相互の同時通訳があったが、音響効果はあまりよいとは言えなかった。

プログラムを以下に示すが、1 講演は 30 分～60 分で討論の時間も十分にあった。

#### 第1日午前

9:00～9:30 開会の挨拶

IIC 会長, S. Keck (米国), NKF 会長, Schiller 他

1. A. Geijer, A. M. Franzén (スウェーデン): スウェーデンにおける織物の保存。問題点と実際。
2. A. France-Lanord (仏): サンドニの王墓における織物関係の遺物 (16 mm 映画のみ供覧)。
3. S. Müller-Christensen (西独): Bamberg と Speyer 寺院の織物の保存。
4. E. Schjölberg (スウェーデン): ノルウェイ Bergen の Bryggen の中世の毛織物。

#### 第1日午後

5. A. A. Jeroussalemskaja (ソ連): 北部コーカサスにおいて最近発掘された絹織物とエルミタージュ美術館におけるその保存。
6. P. Reeves (米国): ペルーの Paracas 屍衣の保存。

夜、国立考古博物館における織物関係の特別展観見学。

#### 第2日午前

7. H. W. H. Hodges (カナダ): 陶器の保存の問題点。
8. J. Larney (英国): 陶器の修理。
9. P. Rado (英国): 陶磁器に対する洗剤の作用 (代読)。
10. E. T. G. Mibach (カナダ): 土器の修理。
11. J. Olive, C. Pearson (オーストラリア): 海底考古遺跡から発掘された陶器の保存。

#### 第2日午後

12. B. Arrhenius (スウェーデン): 野外における分析と保存。
- 13.\* O. P. Agrawal (インド): インドにおける洞窟絵画の保存問題 (代読)。
14. G. Avery (南ア): 南アフリカの岩石美術の現状と問題。
15. L. G. A. Smits (ボツアナ): Leshoto における岩石美術の保存と保護。
16. J. D. Clarke (オーストラリア): 西部オーストラリア Port Hedland におけるアボリジンの遺跡の保存。
17. J. M. Taylor (カナダ): カナダにおける岩石絵画の自然破損。

#### 第3日午前

18. J. Lowe (英国): スティンドグラスの保存。
- 19.\* D. King (英国): スティンドグラスの修理。
20. A. Moncrieff (英国): ガラス器の保存における問題点。

21. E. Fodl-Kraft (オーストリア)：中世スティンドグラスの腐蝕—保存—修理。
22. R. Newton (英国)：中世スティンドグラスの保存。
23. A. Wolff (西独)：ケルンにおいて用いられている Jacobi 法による中世スティンドグラスの保存。
- 24.\* N. Gerassimova (ソ連)：エルミタージュ美術館における古代ガラスの保存(代読)。

第3日午後

25. R. H. Brill (米国)：crizzling—ガラス器保存における一問題。
26. J. C. Ferrazzini (スイス)：中世ガラスの腐食の反応機構。
27. J. F. Asmus (米国)：スティンドグラス保存におけるレーザーの使用。
28. D. Ogden (英国)：新しいガラス接着剤。

夜 Wasa 号の帆の保存についての講演(Wasa号博物館)。

第4日午前

29. G. H. Grosso (米国)：遠隔遺跡における水浸遺物の現場保存。
30. W. E. Novis (英国)：モザイク敷石の取り外し。
31. C. E. S. Hett (カナダ)：不利な条件下の土壌断面の移動と運搬。
32. J. Price (英国)：大型脆弱な遺物の移動についての野外実験。
33. C. Rose (米国)：考古学的保存への新アプローチ。
- 34.\* H. Mckerrell, C. Martin (英国)：水中考古学と関連した保存の問題。

第4日午後

35. L. Barkman (スウェーデン)：鉄の腐食と保存。
- 36.\* A. Bresle (スウェーデン)：鉄処理のリチウム法。
37. N. A. North, C. Pearson (オーストラリア)：海底から発掘した鉄遺物の保存法研究。
38. O. Patoharju (フィンランド)：気水領域から回収した大砲の保存。
39. J. Lehmann (ポーランド)：海底で発掘された青銅砲の保存。
40. Forbes 賞受賞講演。L. Barkman (スウェーデン)：Wasa 号の保存。

第5日午前

41. R. Wihr (西独)：鉄遺物の電解脱塩。
42. J. Fenn, K. Foley (英国)：鉄の受動態。
- 43.\* J. E. Cross (英国)：考古学的発掘による大型鉄遺物の安定化。
44. T. Weisser (米国)：銅合金の脱合金化(腐食)。
45. H. Lane (英国)：鉛の還元。

46. D. Charalambous, W. A. Oddy (英国) : 銀の“固化還元”。

第5日午後

47. W. D. Richey (米国) : キレート試薬 — 総合報告。

48.\* M. Pourbaix (ベルギー) : 電気化学的腐食。

49.\* V. Greene (米国) : 青銅器保存に対するベンズトリアゾールの使用。

50. W. A. Oddy (英国) : 陳列中の金属の腐食。

51. H. W. M. Hodges (カナダ), K. Holm (デンマーク) : 金属器の保存における問題と ethics。

52. 特別討論。E. Heer (スイス), A. Hoff (デンマーク) : 武器の修理における ethics (注  
ethics はうまい訳語が見当たらないが、欠損した部分をどのように補充するかという問題など、  
修理道德とでもいうことを意味する)。

講演内容は約250頁の本印刷の要旨集として参加者に配布されたが、要旨のないもの(題目中の\*印)があり、また当日別にプリントして配布されたものもあった。一方要旨が印刷されていないが  
ら欠席で、講演のないものもあった。たとえば Sri Lanka (セイロン島) の岩石上の絵画に関する  
報告など。各要旨は二、三を除いて多くは充実した内容を持ち、論文と言うべきものである。

### 3. 論文内容

全部の講演を聞いたわけではないが興味のある若干の報告の内容を紹介することにする。(5)  
は北部コーカサス Mochtchevaja Balka で発掘された7~9世紀の墓から出た絹織物に関するもの  
で、連珠文でかこまれた円形の中に動物らしいものを表現した絹布の断片は興味深かった。陶器の  
修理は日本における土器の接合とあまり差はないように思えたが、米国の発表者のスライドは色鮮  
かであって、英国の報告の汚ないスライドと対照的であった。また南アフリカからの岩石上の絵画  
については新しい知見が多かった。

第3日のステインドグラスの諸報告は何れも力作で、英国の King は修理についての第一人者の  
由であるが、多くのカラーズライドを見せて、ガラス窓の腐食、汚損の状況を示し、清掃、修理の  
結果を紹介した。ステインドグラスについては英、独、オーストリアとそれぞれ技法が異なり、論  
戦になるものと参加者一同見まもっていたが、期待に反して質問も比較的少かった。議論はかえっ  
て同日午後になって爆発し、(26)でスイス工業大学の結晶物理学者がガラス表面につけた傷が源  
になって腐食が進行することを報告し、暗に King 等のガラス表面の腐食層の除去が行き過ぎであ  
るかのような発言をしたため大論戦となり、1時間以上にわたって10人近い発言があった。これ  
は結局除去の程度の問題なのであるが、たどたどしい英語で自説を主張して譲らぬスイスの研究者  
のガンバリ方は相当なものであった。

ガラスの関係では米国コーニングガラス博物館館長のブリルが crizzling というガラス器の表面にチリメンジワのような細かい亀裂が出来る現象をくわしく研究し、防止法を述べたのが注意をひいた。これはガラス器の表面が水を含んだ後、脱水されるために起る現象で、ガラス器の保存は相対湿度 40 ~ 60 % が適当であり、25 % 以下は危険であり、40 ~ 25 % は長期間の保存には問題であるとの結論であった。相対湿度 100 % に保たれていたガラス器が湿度 0 % にされると 16 時間で crizzling を起した写真には一同思わず息をのんだ。

そのほかレーザーでステインドグラスの表面を照射し腐食層を除くという実験は、照射面積の微小と窓の面積の広大とを比べれば実際上は問題にならない。

またベンズトリアゾールという薬品は銅器表面の腐食を防ぐために数年来用いられているが、その効果については賛否両論があり、議論が相当はげしかった。実際面から見て注目されたのはブリチッシュミュージアムの Oddy の報告で、陳列ケース用のマホガニ材からの防虫剤、ケース内敷物の染料ならびにそれを難燃性にするための薬品等が金、銀、銅等の金属器を腐食させた実例をあげて博物館関係者の注意をうながした。これは我国でも同じことが起り得るわけで、予じめテストする必要がある。

この IIC の会議の講演は他の国際会議のように公募しないので、どのようにして選択されているのかよくわからない。前回 1972 年リスボンの会議で私が高松塚の報告をした時も、企画者の 1 人から依頼を受けたのであって、おそらく今回も、同様な方式をとったのであろう。しかし (47) のような全く保存科学と関係ないような講演が加えられているのは理解し難い。もっとも講演者はベンズトリアゾールによる銅の防食の研究者とのことであったが、内容は錯塩化学の初歩の講義に過ぎなかった。

#### 4. その他の行事、将来の会議など

今回の参加者は IIC と NKF の両方の会議に別れたけれども、社交的な行事、市役所、博物館などのレセプション、見学などは共通であった。その中で第 3 日の夜国立美術館でのレセプションの後、映画があり、中国の銅器ときいていたが、実際始まってみると日本鉄鋼協会が岩波映画に依頼してつくった『たたら製鉄』（英語版）が上映され驚いた。これは米国から持って来たプリントらしく、後でいろいろ私は質問を受けた。これは芸術的にはすぐれたものであるが、製鉄法の説明としてはやや不足で日本人にも了解し難い点がある。

またその後、東アジア美術館が特に夜間に開館して故グスタフ 6 世の収集品の陳列を見せてくれた。王宮内にあったままの家具等がならべられており、すぐれたコレクションであることは周知の通りである。

最終日の夜はストックホルムの有名なオペラ附属のレストランで晩餐会があったが、次の会議の場所については未定のままであった。カナダが候補に上っており、中国、日本も話題に上っているとの会長の発言があり、私はいささか驚ろいた。

IICには台湾は加入しているが、中国は参加していない。しかし米国フリヤ美術館とカナダ、オタワの国立美術館から昨年から今年にかけて相次いで保存科学者が美術史家と共に用務で北京を訪れており、故宫博物館(?) 附属の修理室を見学している。その時のスライドも会議の途中で非公式に見ることができた。何れは加入する時期が来ると思われる。

日本の場合は個人の会員は十数人であるが、美術館、博物館の加入は僅かに元興寺の修理研究室のみで、国立文化財研究所はもとより国立博物館、公共美術館等は一つも入っていない。他の諸国の国立博物館がほとんどすべて会員であるのに比べて著しい差がある。この点は今後関係者に認識を改めてもらう必要がある。

さらに IIC の会議には我国の若い保存科学者、技術者が参加して、大いに他国の人達と交流し、見聞を広めることも重要である。日本から過去の会議に参加した者は私を含めすべて私費であって、博物館などから派遣されたものは 1 人もいない。もし将来日本で IIC の会議開催を希望されることがあるとしても、数人のものを除いては、会議の様子すら知らない現状はどうしようもない。日本で会議を行えば、これは日本のみならず海外の技術者、研究者にとっても得るところが大きい。東洋としてはインド、中国、日本などが将来いつかは会議を開くことになると思われる。

保存科学ばかりではないが、学術上の国際協力というものは個人同志の交流連絡の上に成立しているもので、単に文通のみでできるものではない。その点を考えると日本からの出席者がなければ、長い間かかって出来上った連絡網が切れると思って、浪人の私が今回も出かけたわけである。

IIC ができて 25 年たち、創立当時の会員の中には死去する人、引退する人が増え、さらに今回は絵画が題目に入っていなかったのも、参加者の顔ぶれが大分変り、特に若い新しい顔が多かった。また婦人の研究者、技術者が目立ち、参加者の半分以上、発表者の約半数が婦人であった。世代の交替を強く感じたことであって、日本からも新しい人達の参加を特に望みたい。ユネスコ関係の ICOM の会議との関係についても一言触れたいと思ったが、予定の紙数に達したのでこれで報告を終る。(1975. 7. 2)

A Report on the IIC-NKF Congress 1975 held in Stockholm on June 2-7, 1975.

Kazuo Yamasaki

The titles of papers read at the IIC Congress are given, and the papers which were interesting to the author are briefly reviewed.